暇零's MS Station

暇零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
暇零'ｓ　ＭＳ　Ｓｔａｔｉｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ０７５１Ｔ

【作者名】
暇零

【あらすじ】
転載・発掘などを含む、自分のオリジナルＭＳのまとめです。閲覧自由、貸し出しもしています。希望の方は、気軽に声をかけて下さいね。また、極端な機体構成だったり、ちょこちょこと公式設定に反したり、時代にそぐわないような機体もあるとは思いますので、そういう事の考証材料にするのもアリです。

ＲＧＭ－７９ＳＧ

ＲＧＭ－７９ＳＧ
スパルタン・カスタム

【生産形態】
量産機改修型ＭＳ
【全高】
１８．４ｍ
【頭頂高】
１８．０ｍ
【本体重量】
４２．２ｔ
【全備重量】
７１．６ｔ／９６．１ｔ
【ジェネレータ出力】
１，４８０ｋＷ
【スラスター総推力】
１１４，０００ｋｇ／１５２，０００ｋｇ
【センサー有効半径】
９，２００ｍ
【装甲材質】
チタン・セラミック複合材、一部ルナ・チタニウム合金
【動力源】
ミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉
【特殊機能】
可動式フェイス・カバーユニット
格闘戦闘時等にセンサー部を防護する為と、超長距離狙撃戦闘での照準機能の精度強化の二つの役割を持つ。また、平常時のカバー開

放時にはゴーグル内部に点灯するツインアイと頭頂部のアンテナが特徴的であり、ガンダムタイプに酷似した頭部外観となる。

フルアーマー・ウェポン・システム

ＦＳＷＳ計画で開発され、ＦＡ－７８－１で採用された増加ウェポン・システムの設計を取り入れた装備。機体各部に備えられたマウントラッチにより接続される。重量増加によって低下する機動力を補う為に、各部に補助用の小型スラスターが設置されている。任意で強制排除する事も可能であり、その際には爆砕ボルトと同時に閃光弾が炸裂する事で、強制排除時の隙を無くしている。

可変型汎用マウントラッチ

全身に配置された本機最大の特徴とも言える装備であり、本機の武装状況を文字通り支える重要なファクターである。多関節型のアームユニットと電磁石、可変型プラグユニット等を併用して、様々な武装をマウントする事が可能。非使用時にはコンパクトに折り畳んで収納する事で、機体稼動の妨げにならないよう設計されている。

指関節部多目的ランチャー

信号弾やダミー・バルーン、気密漏れ用補修剤（トリモチ）や接触回線用ワイヤー等、様々なツールを運用する為の射出器。指毎に使用可能なツールが異なっている為、やや整備性には劣るものの、幅広い運用が可能な装備である。

全天周囲モニター・リニアシート

ＲＸ－７８ＮＴ－１より技術を継承したコクピットブロック。未だに完全な意味での実用化には至っておらず、同時投影可能な最大視界は水平方向２６０度・垂直方向２２０度となっており、カメラ本体やパイロットの視野移動に反応して視界を移動させる事で、擬似的な全周囲投影を可能としている。また、各インターフェースは地

球連邦軍共通規格のコクピットブロックからの流用パーツが多い為に、やや雑然とした感が拭えずにいる。

【固定武装】

バックパック／マニピュレータ：ビーム・サーベル＊２　（ＴＨＩＢＳ・ｊＧ０１）

標準的な丸型グリップのサーベル。エネルギーＣＡＰを内蔵している為、少しの間ならば機体からの電力供給無しに稼働も可能である。コクピット側から出力を調整する事も可能であるが、エネルギーＣＡＰの寿命を縮めてしまう危険がある他、機体のエネルギー消耗も激しくなり、結果的に長期戦にはあまり向かない機能となっている。

頭部：６０ｍｍバルカン砲　（ＶＣＵ－３０２ＸＣ－Ｔｅｃ／Ｖｅｒ．００４）

当初はＲＧＭ－７９と同等の物を搭載する予定だったが、センサーやコンピュータ等電子系統の装備が肥大化した影響から、頭部側面にポッド式で接続されている。砲そのものは左側のブロックにのみ存在し、右側は砲のカウンター・ウェイト兼弾倉として機能する。金属薬莢方式を採用しており、砲ブロック後端に排莢口が備えられている。

【オプション武装（標準）】

マニピュレータ／右腰部マウントラッチ：ビーム・ライフル　（Ｂａｕｖａ・Ｎｏｒｆｏｌｋ　ＸＢＲ－Ｌ　Ｔｙｐｅ－６）

コンパクトにまとめられたＲＸ－７８ＮＴ－１のビームライフルの設計をほぼそのまま踏襲している。銃身下部にレイル・インターフェースを備えており、状況に応じてグレネード・ランチャーやバイポッド等の多様なオプションパーツを装着可能。エネルギーＣＡＰシステムは装着方式を簡易化しており、これを交換する事で煩雑なエネルギー再充填プロセスを経る事無く、前線での再使用が可能と

なっている。

マニピュレータ／前腕部マウントラッチ：曲面型シールド　（ＮＦＨＩ　ＲＧＭ－Ｍ－Ｓｈ－ＡＧＤ）

ＲＧＭ－７９ＳＰやＲＧＭ－７９Ｇ等が装備するものと同様のものであり、剛性よりも跳弾効果を重視した曲面構造となっている。裏面にはマニピュレータで保持するハンドルとマウントラッチが設置されており、また、ビーム・ライフルの予備エネルギーＣＡＰカートリッジを携行する事が可能である。

【オプション武装（任意）】

マニピュレータ／後腰部マウントラッチ：マウントラッチ：ロングレンジ・ビーム・ライフル　（ＢＯＷＡ　ＢＲ－Ｓ－８５－Ｌ３Ｒ）

スナイパー系ＭＳのマストアイテムとも言える装備であり、本機のモデルは一般的なそれと比して携行性が高められている。光学式・電子式の両方の照準機能を有しており、グリップに配されたコネクタを介して機体にデータを送信、更に機体自体が捉えた照準データと組み合わせての最終ロックオンという三重の照準調整を行う事で、ずば抜けて高い命中率を誇る。しかしそれは、銃身過熱や照準補正のタイムラグ、莫大なエネルギー消費と引き換えにして手に入れた高性能であり、対機動兵器戦闘に適した兵装とは言い難い。出撃前に後述のハイパー・バズーカと選択して装備する。

マニピュレータ／後腰部マウントラッチ：ハイパー・バズーカ　（ＢＬＡＳＨ　ＨＢ－Ｌ－０７／Ｎ－ＳＴＤ）

地球連邦軍製ＭＳ用の武装としては一般的だが、有効射程距離の向上、より破壊効率の高い弾頭への変更などの改良が施されている。口径３６０ｍｍ、装弾数は７＋１発のカートリッジ式。マウント状態からジョイントアームを延伸させての射撃も可能であり、本体から切り離した状態でも通信用ワイヤーを介した指令により射撃可能。

出撃前に前述のロングレンジ・ビーム・ライフルと選択して装備する。

マニピュレータ／左腰部マウントラッチ：ブルパップ・マシンガン（ＨＦＷ－ＧＭＧ／ＭＧ７９－９０ｍｍ）
シールドと同じくＲＧＭ－７９Ｇが装備するモデルの改修型。銃身が多少延長されており、集弾率と射程が向上した。また、空となった弾倉を自動排出する際に、排出された弾倉が機体のカメラを直撃し破損する事例が確認された為、弾倉排出の機能はマニュアル方式に変更されている。

【フルアーマー・ウェポン・システム】
右背部マウントラッチ：３６０ｍｍロケット砲　（ＹＨＩ　ＥＲＲＬ－ＴＹＰＥ．Ｄｏｃ－０７／３６０ｍｍ）
高初速のロケット弾を射出する砲であり、ＦＡ－７８－１とほぼ同等のモデル。後部に備えられた排出器を使用して冷却ガスを排出する事で、反動の低減と砲身の強制冷却を可能としており、ある程度の連射性を確保している。装弾数は６＋１発。

右前腕部マウントラッチ：連装ビーム・ライフル　（ＢＬＡＳＨＷＢＲ－Ｌ－８０Ｓ）
二門の銃口を持つタイプのビーム兵器であり、それぞれに専用のエネルギーＣＡＰ機構を搭載している為に、連射性は高い。出力も高めに設定されており、対機動兵器戦闘のみならず対艦攻撃にも充分な威力を誇る。また、マウントラッチに固定して使用する為にマニピュレータを塞ぐ事は無く、通常のビーム・ライフルも併用する事が出来る。

左前腕部マウントラッチ：パイルバンカー・ユニット　（ＹＨＩ ＲＧＭ－Ｓ－Ｐｂ－ＷＦ）

超高硬度に精製されたタングステン系合金製の杭を実包炸薬を撃発させる事により高速射出し、敵機の装甲を貫徹する近接戦闘用装備。耐久性と貫通力に優れており、機体ジェネレータに負荷をかけずに運用出来るという利点があり、突進からの運動エネルギーを上乗せすれば、装甲厚に秀でたＭＡすらも一撃で仕留める事が可能。

膝部側面マウントラッチ：ミサイル・ランチャー　（ＹＨＩ　８ＭＬ－７９ＸＳ）

対ＭＳ戦闘に適したマイクロミサイルポッドであり、直撃さえすれば重ＭＳの四肢も破壊可能。追尾機能は無く、複数目標に対し飽和攻撃を仕掛ける「面の制圧」を目的とする為、厳密に言えばミサイルではなくロケット擲弾と言うのが正しい分類である。斉射後空になったポッドは、そのままマウントしておく事でスペースド・アーマーとしても機能する。

両肩部マウントラッチ：有線式小型ミサイル＊２＊２　（ＹＨＩ　４ＭＬ－７９ＷＲ）

原形機であるＲＧＭ－７９ＳやＲＸ－７９ＢＤ系統に採用されたモデルの発展型。有線誘導方式を採用している為、ミノフスキー粒子散布下でも、ケーブルが切断されたり、目標が射程圏外に移動しない限りはある程度の誘導が可能となっている。

【備考】

ＲＧＭ－７９ＦＣやＲＡＧ－７９－Ｇ１同様、ＲＧＭ－７９系ＭＳを改修して無理矢理ガンダムタイプとした全領域行動型ＭＳ。厳密に言えばガンダムタイプに『似た』機体であり、センサー系統の換装パーツの手配が間に合わなかった為に、カメラアイは改修前とあまり変わらないゴーグル形状となっている。しかし、改修前から高水準に収まっていたスペックを更に引き上げた事で見掛け倒しにはならず、むしろガンダムタイプとしてもそこそこ通用するような物

になっている。
改修は基本的に外装よりも内部構造やシステム関連に重きを置いており、胴体部と隣接した四肢の一部には、内骨格構造も試験的に採用される等、野心的な設計が盛り込まれている。最大の特徴は武装に応じてその形状をある程度変更出来、様々な種類の武装をマウント可能な汎用性の高いラッチにある。また、全身に備えられたこれを利用する事で、ＦＳＷＳ計画に準拠したフルアーマー・ウェポン・システムにも対応可能である。

ＡＱＭ／Ｅ－Ｘ１４Ｆ

ＡＱＭ／Ｅ－Ｘ１４Ｆ
フォビドゥンストライカー

重量：２２．４８ｔ

武装
・ラミネート装甲式大型可動シールド＊２
ベースであるＧＡＴ－Ｘ２５２【フォビドゥン】の装備であるエネルギー偏向装甲『ゲシュマイディッヒ・パンツァー』のフレーム構造を参考にして開発された防御兵装であり、エネルギーを消費する事のないラミネート装甲を採用する事で、機体稼働時間に影響を及ぼさないようになっている。ただし、その機構上大出力のビームを完全に防ぎ切る事は出来ない為、砲撃戦闘用ＭＳからのビーム攻撃や艦砲射撃には比較的脆いと言えるが、それでも通常のビームライフル程度のビームであれば数発が着弾しても平気であるので、通常戦闘においては充分な防御力を発揮出来る。

・１１５ｍｍ機動リニアレールキャノン『ワインダー』＊２
本装備の火力を支える装備であり、電磁気力を用いて加速された砲弾を射出する実弾火器。超高初速で放たれた弾丸はかなりの威力を誇り、弾種によってはその運動エネルギーが生み出す着弾の衝撃によってＰＳ装甲にすらダメージを与える事がある。速射性も高く、また、【フォビドゥン】では８８ｍｍレールガン『エクツァーン』が装備されていた所に配置されている為に砲自体の可動範囲も広く、中距離からの射撃戦闘に用いるには有効な火器である。

・２００ｍｍエネルギー砲『ツォーンＭｋ２』

後にGFAS－X1【デストロイ】に搭載される事になる物と同等の物であり、こちらがプロトタイプに相当する。誘導プラズマ砲『フレスベルグ』の代わりとなる装備であり、磁場干渉による軌道湾曲制御等のプロセスが不要となった為にこちらの方が汎用性は上である。高い威力に比例するようにエネルギー消費も大きい為、使用には慎重を期する必要がある。

・（重斬艦斧『グレンデル』）

格闘戦闘用に開発された両刃の長柄斧であり、重刎首鎌『ニーズヘグ』の代替装備。巨大な鎌であった『ニーズヘグ』より取り回しは良く、連続しての攻撃がスムーズかつ簡単に行えるようになった。切れ味も鋭く、実体刃ながら並みのMSや艦艇の艦橋部分等も切り裂く威力を誇る。非使用時には柄と刃を折り畳み、大型可動シールドの裏側にマウントする事が出来る。

・（94mm大型機関砲『アルムプファイル』＊2）

両腕のマウントラッチに接続するオプションの機関砲ポッド。一般的な近接防御用機関砲より一回り程度大きい口径となっており、その為に破壊力は増している。用途は変わらず中近距離でのMS迎撃が主ではあるが、格闘戦を仕掛ける際に敵に発砲する事で牽制用としての意味合いも持ち合わせている。これ自体にもマウントラッチを有しており、腕部にこれを接続した状態でもシールドを装備する事は可能である（最も、大型可動シールドがある為に敢えてシールドを装備する意味は薄いが）。

解説

GAT－X252【フォビドゥン】の高い防御力と攻撃力に着目した開発陣が、背部兵装ユニットのみをストライカーパック化し、主力機体であるGAT－01A1【ダガー】に装備可能としたもの。装備した機体の胸部上面に沿うように配置されるレールが特徴的で

あり、これを用いる事で【フォビドゥン】同様に強襲形態へと変形が可能。また、ユニットが大型である事を逆手に取り、専用のバッテリーとパワーエクステンダーを内蔵する事で、機体本体の消耗を低く抑えている。

しかし開発段階で、多数の火器群を一度に運用可能な程のキャパシティがパイロットに無い事や大型可動シールドの操作の複雑化、変形における激しい重心移動、そして何よりも他のストライカーパックに比べて高いコスト等の欠点が露呈し、試作品数基を残して一旦は開発中止となった。

以降は倉庫で埃を被って解体を待つかと思われたが、C．E．７３の開戦に伴って第８１独立機動軍『ファントムペイン』によって試作品全てが調達され、保守整備の為に予備パーツの生産が開始されている。恐らくは隊の主力機体であるＧＡＴ－０１Ａ２Ｒ【スローターダガー】に装備されているものと思われるが、隊そのものが非公式な組織である為に詳細は不明。しかしながらパーツの注文は定期的にある為、実戦投入は成されている模様。

ＺＧＭＦ－１０００／Ｈ

ＺＧＭＦ－１０００／Ｈ
ラピッドザクウォーリア

【頭頂高】
１７．１９ｍ
【全高】
１９．２５ｍ
【本体重量】
４５．１８ｔ
【全備重量】
７３．０９ｔ
【装甲材質】
超高硬度金属
【動力源】
バッテリー（非常用にデュートリオンビーム送電システムを併設）
【特殊機構】
デュートリオンビーム送電システム（Ｍ２コンバータ）

【標準武装】
・ＭＭＩ－Ｍ６３３Ｋ　ビーム突撃銃
一般のＺＧＭＦ－１０００が携行するそれの改修型。銃身を切り詰めて携行性を高める他、特徴的なパンマガジン型のエネルギーパックは銃身側面への固定接続に変更され、冷却装置も強化する事で整備性の向上や熱センサーへの被発見率の低下を狙っている。

・Ｍ７３－ＡＡＫ　対装甲ダガー×２
ＺＧＭＦ－Ｘ５６Ｓの装備するＭ７１－ＡＡＫ　フォールディング

レイザーを改良した物であり、本機の数少ない格闘戦闘用兵装の１つ。実体刃と振動波を併用しており、バッテリーの負担は少ない。原形であるＭ７１－ＡＡＫに比して大型となっており、また、折り畳み機能もオミットされている為に、純粋な強度は向上している。

・ＭＡ－Ｍ０４Ｓ　ショルダービームスパイク
肩部曲面アーマーのスパイクに内蔵された格闘兵装。ＺＧＭＦ－Ｘ６６６Ｓの装備するＧＤＵ－Ｘ７　突撃ビーム機動砲のビームスパイク機能の実証試験的な側面も持っており、稼働率には若干の不安要素も含むものの、威力は充分なものがある。

【オプション武装】
・ＭＭＩ－Ｍ８Ａ３　７６ｍｍ重突撃機銃
ＺＧＭＦ－１０１７等の装備するモデルと同様。

・ＭＡ－Ｍ９２　斬機刀
ＺＧＭＦ－１０１７Ｍ２の装備するモデルと同様。

・ＺＲ２０Ｅ　高性能炸裂弾
・ＺＲ２７Ｉ　テルミット焼夷弾
・ＺＲ３０Ｆ　通常榴散弾
・ＺＲ１１Ｑ　閃光弾
・ＺＲ１３Ｑ　発煙弾
以上５種、ＺＧＭＦ－１０００の装備するモデルと同様。

・Ｍ６８　キャットゥス５００ｍｍ無反動砲
ＺＧＭＦ－１０１７等の装備するモデルと同様。

【備考】
Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の制式量産型ＭＳ、ＺＧＭＦ－１０００をベース

に改修された空間戦闘・強襲用の機体。

ラピッドウィザードは高機動戦闘を主眼に開発され、同様のコンセプトを持つブレイズウィザードに比較して固定武装こそ皆無なものの、推進剤を多く搭載出来る為に機動力・戦闘継続時間共に圧倒的に勝っている。また、各部にハードポイントを設置してある為に、多数の武装を一度に携行可能である。

胸部に試験的にＭ２コンバータを搭載しデュートリオンビーム送電システムによる急速バッテリー充電も可能ではあるが、あくまで補助的なものであり基本的には電源車や艦艇に搭載された充電設備を使用する。

バッテリーに負担を強いるビーム兵器は標準装備の二種のみと、機動力に多くのエネルギーを割り振る事を目的とした設計となっており、一般のＺＧＭＦ－１０００であれば対ビームシールドが装備される箇所にはＺＧＭＦ－Ｘ１９Ａの物と似た小型の姿勢制御用スラスターユニットを設置、曲面アーマーのスパイクも単純な円錐形に改められ、攻撃力増加の為にビーム展開装置が内蔵されている。

赤系で纏められた機体色はステルス機能も兼ね備えており、ニュートロンジャマーによる電磁波撹乱効果が高い場合に赤外線すら遮断される事や、高速度で対象から遠ざかる際に発生する赤方偏移と誤認させる（最も、ＭＳが出せる速度では機体が真っ赤になる程に極端な赤方偏移は発生させようも無いのだが）事を目的としていると言われるが、ただ単に金属腐蝕防止の為の下地塗装のままであるとか、テストパイロットのパーソナルカラーであると言った説も存在しており、詳細は不明である。

また、ＺＧＭＦ－１０００系に於いては極めて珍しい事だが、本機には機動試験中に機体が採取したデータを観測所に円滑に送信する為に、頭部にブレード・アンテナが装備されている。この為、右肩部の曲面アーマーが排除されたメンテナンス時等には、指揮官用のＺＧＭＦ－１００１と誤認される事もあったと言う。

DT－6800E

DT－6800E
ドートレス・アサルト
頭頂高：16．3m
全高：17．2m
本体重量：7．4t
全備重量：19．8t

（武装）

115ミリマシンガン
右腕に装備される大型のマシンガン。弾倉ユニットは両腰に設置されており、給弾ベルトによる装填がなされる。威力は非常に高く、並みの機体であれば一斉射で蜂の巣に出来るほどである。非使用時は弾倉ユニット側面にマウントする。

92ミリ六連装ガトリングキャノン×2
両肩部に装備される射撃兵装。口径は小さいものの、優れた連射性と初速で威力は極めて高い。射角はある程度自由に変更出来る為に主に突撃時に用いられ、単機での面制圧を可能にした本機の要とも呼べる装備である。

グレネードランチャー×2
歩兵用の対戦車ロケットに似た形状の装備。脚部に装着したままでの射出も可能ではあるが、大口径の弾丸を射出する事での反動や照準の正確性を考えて、両手で保持しての発射が推奨されている。

赤外線誘導式ミサイルポッド×2
三連装のミサイルポッドで、両肩部に装備される。機能的にはGファルコンのそれと同一である。熱源を感知して誘導する為に、簡素な仕組みながら信頼性は高い。

コンバットナイフ×2
シールド裏にマウントされた折り畳み式のナイフであり、本機唯一

の格闘兵装。切れ味は非常に良く、戦車だろうがＭＳだろうが簡単に切り裂いてしまう。
腕部固定式小型シールド×２
両腕部に設置されたシールドだが、サイズが小さい為にどちらかと言えばシールドというよりも増加装甲に近い。取り回しは非常によく、かつ堅牢でもあるので、あらゆる場面で重宝される防御装備である。
備考
拠点強襲用にカスタマイズされたドートレスであり、旧地球連邦軍によって設計された。弾丸の規格や装甲材質等がありふれたものであった事から、戦後になってアルタネイティヴ社が建造・販売している。
ジェネレータに負担を強いるビーム兵器は完全に撤廃され、その分機動力や運動性は大幅に向上しており、１Ｇ環境下ですら機体を前傾（ほとんど地面と平行になるくらいに）しての滑空突撃すら可能とした。
撃ちきり弾切れとなった兵装はデッドウェイトにしかならない為、マウントラッチから爆砕ボルトによって順次投棄が可能となっている。

ＲＭＳ－１５４Ｒ／ＣＲ

ＲＭＳ－１５４Ｒ／ＣＲ
バーザムＭｋ－？　クロスレンジカスタム

【生産形態】
少数生産機
【基礎原形設計】
ニューギニア基地工廠
【実機開発建造】
アナハイム・エレクトロニクス社（フォン・ブラウン支社工廠）
【全高】
２４．４ｍ
【頭頂高】
１９．２ｍ
【本体重量】
３４．２ｔ
【全備重量】
５５．７ｔ
【ジェネレータ出力】
１，７２０ｋＷ
【スラスター総推力】
８４，５００ｋｇ
【センサー有効半径】
１０，９２０ｍ
【装甲材質】
ガンダリウム合金
【動力源】
ミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉

【特殊機能】
マグネット・コーティング
【固定武装】
肩部シールド・バインダー＊2　（AE　RMS・L—Sh—AD）
肩部にマウントされる防御装備兼推進機器。ORX—005やRX—121等、様々な開発元の機体が採用した装備な為に信頼性は高いと判断され、本機にも搭載される運びとなった。軽快な運動性能を支えながらも耐ビーム・コーティング処理による高い防御力を誇る、優秀な装備である。

ビーム・サーベル＊2　（XB—F—1062M）
両方のシールド・バインダー先端部裏面にマウントされる格闘兵装。マニピュレータによって保持・使用するのが一般的な用法だが、緊急時にはバインダーにマウントしたまま使用する事も可能。出力は0．55MWと、比較的高出力に設定されている。

【オプション武装（標準）】
頭部30mmガンポッド　（VCU—508EX—NG／Ver．013）
RX—178、RMS—154に続く伝統のオプション。本機のモデルは砲身が外部に露出しており（サーマル・ジャケットに包まれてはいるが）、基部から可動する為に高い迎撃性能を持っている。口径こそ減格されてはいるものの、連射性と初速の向上によって威力の低下を最小限に抑えている。

サブマシンガン　（HFW—SMG／SL87—90mm）
RGM—79C等の装備であるブルパップ・マシンガンの改修型。フレーム上部のキャリングハンドルを廃止、バレルを更に切り詰めて小型化し、至近距離での使用に特化されている。また、本体下部にバーチカル・フォアグリップを採用したり、箱型垂直マガジンを

下部装着式にしたりと改良箇所は多岐に渡り、注意深く観察せねば原形モデルとの関連性を見出す事は難しい。

【オプション武装（任意）】

ビーム・ランサー　（ＸＬ－Ｎ－１１２４Ｒ）
やや長柄の格闘兵装であり、突撃槍を模した形状のビーム刃を展開する。自ら突撃して使用するというよりは、突撃してくる敵機を迎撃する為に用る事を目的としている。ビーム刃の展開範囲は広い為に、ビーム発振器付近を保持して使用すれば、大振りのビーム・ソードとしても使用可能である。

ビーム・ライフル　（ＢＯＷＡ　ＢＲ－Ｓ－８５－Ｃ４）
ＲＭＳ－１７９等の装備として広く普及しているビーム・ライフルのマイナーチェンジモデル。バレルは旧来のＲＸ－７９［Ｇ］が装備するビーム・ライフル程度に延長され、ロングレンジでの射撃性能の改善に成功している。装弾数は１チャージ辺り１４発とやや心許無いが、機体からのエネルギー供給でのフルチャージまでに要する時間は僅かに３１秒と驚異的であり（改修前のモデルが『次の１発が撃てるまで』に約１５秒かかるという事からも、この数字が如何に桁外れであるかが想像出来よう）、サブマシンガンと使い分ければ迎撃装備としては充分な性能があると言える。

【備考】

エゥーゴにより連邦軍が掌握される直前とも言っていい時期に設計されていた迎撃特化型ＭＳ。ティターンズの保有するニュータイプ及び強化人間専用機は、得てして近接攻撃に対して多少なりとも欠点を有しており、それの直掩機として開発されていたのが、ＲＭＳ－１５４Ｒシリーズである。本機は近接戦闘、特に格闘戦闘に目を向けられたカスタマイズをされており、ニュータイプ専用機のサイコミュ誘導兵器等による射撃を抜けて肉薄して来た敵に対する直接

攻撃を主眼に置かれている。また、随伴機という立場上推力も高く、純粋な値だけを見ればRX－178を上回っている。
当然の事ながらコストも原形機に比べてかなり高騰化はしたものの、それに見合っただけのスペックは有しており、また、原形機譲りの高い操縦性はパイロットに対して負担を強いる事は無く、多彩な武装ながらも一般用の慣熟訓練をこなせば相当に使いこなす事が出来る。
尚、ティターンズの瓦解した現在となっては、ニュータイプ専用機の護衛というよりは、純粋に隊長機や護衛対象等の高性能直掩機としてアナハイム・エレクトロニクス社が生産・販売している。

RMS－154R／SC

RMS－154R／SC
バーザムMk－？　スナイパーカスタム

【生産形態】
少数生産機
【基礎原形設計】
ニューギニア基地工廠
【実機開発建造】
アナハイム・エレクトロニクス社（フォン・ブラウン支社工廠）
【全高】
24．6m
【頭頂高】
19．2m
【本体重量】
36．4t
【全備重量】
59．7t
【ジェネレータ出力】
1，780kW
【スラスター総推力】
83，200kg
【センサー有効半径】
13，140m
【装甲材質】
ガンダリウム合金
【動力源】
ミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉

【特殊機能】

マグネット・コーティング

複座型コクピット・ブロック

縦列複座型のレイアウトとなっており、ＴＧＭ－７９Ｃに似通った構造。前席に主操縦士（ガンナー）が、後席に管制士（オペレーター）が搭乗し、任務を分担して行う事が出来る。護衛対象や僚機のパイロットが何らかの事情により操縦不能に陥った場合、レーザー通信を用いて対象機体のコントロール権限を管制士席にて掌握、操縦を代行する事も可能である。

【固定武装】

ビーム・サーベル＊２　（ＸＢ－Ｆ－１０６２Ｍ）

腕部の箱型マウントラッチに格納される格闘兵装。出力は０．４０ＭＷに減格されてはいるが、それでもＵ．Ｃ．００８０年代中期当時の一般的なビーム・サーベルと同等の出力を維持している。

【オプション武装（標準）】

頭部３０ｍｍガンポッド　（ＶＣＵ－５０８ＥＸ－ＮＧ／Ｖｅｒ．０１３）

ＲＸ－１７８、ＲＭＳ－１５４に続く伝統のオプション。本機のモデルは砲身が外部に露出しており（サーマル・ジャケットに包まれてはいるが）、基部から可動する為に高い迎撃性能を持っている。口径こそ減格されてはいるものの、連射性と初速の向上によって威力の低下を最小限に抑えている。

ロング・ビーム・ライフル　（ＮＦＨＩ　ＸＢＲ－Ｌ－８６Ｆ）

機動兵器用ビーム兵装としては実にＲＸ－７８ＮＴ－１の装備したビーム・ライフル以来となる、ノーフォーク産業の開発した狙撃・長距離射撃用兵装。フローティングバレルとバイポッドを採用しており、ＭＳの携行する兵装の中では珍しい構造をしている。エネルギーパックは大容量に設定された専用の物を用いる事で、高威力の

ビームを連射する事が可能である。照準器は銃身上部に光学式高感度ビデオカメラと赤外線センサー、レーザー測距装置を縦一列にレイアウトした専用のボックス型複合センサーユニットをマウントしており、５，０００ｍ超での対機動兵器戦闘でも高い命中率を誇る。

ビーム・ライフル　（ＢＯＷＡ　ＢＲ－Ｓ－８５－Ｃ５）
ＲＭＳ－１７９等の装備として広く普及しているビーム・ライフルのマイナーチェンジモデル。ＲＭＳ－１５４Ｒ／ＣＲの携行するモデルに比べて短銃身であり、中近距離での使用を目的としている。連射性能に関して言えばバースト射撃モードを起動する事でビーム・マシンガンの真似事も可能であり、命中率の向上にも一役買っている。非使用時は後腰部のマウントラッチに懸架する。

【オプション武装（任意）】

サブマシンガン　（ＨＦＷ－ＳＭＧ／ＳＬ８７－９０ｍｍ）
ＲＧＭ－７９Ｃ等の装備であるブルパップ・マシンガンの改修型。フレーム上部のキャリングハンドルを廃止、バレルを更に切り詰めて小型化し、至近距離での使用に特化されている。また、本体下部にバーチカル・フォアグリップを採用したり、箱型垂直マガジンを下部装着式にしたりと改良箇所は多岐に渡り、注意深く観察せねば原形モデルとの関連性を見出す事は難しい。

【備考】
ＲＭＳ－１５４Ｒシリーズの内の１機であり、ＲＭＳ－１５４Ｒ／ＣＲと対になる長距離支援戦闘用ＭＳ。
センサー有効半径はＣＲ型と比して約２０％の増強が成されており、元来広範囲をカバーしうるＲＭＳ－１５４Ｒの観測能力を更に向上させ、早期警戒や長距離戦闘での優位性を確保している。
ＮＴ専用機による攻撃と共に、長距離から直接攻撃可能な敵を排除

する事を主眼に開発・調整されており、一般機を排除してＮＴ専用機が敵指揮官機との戦闘に専念出来るようにサポートするのが本来の使用コンセプトである。しかし、実戦に於ては索敵範囲ギリギリに侵入した敵を速やかに迎撃せねばならない為、ＮＴ専用機と互いにデータリンクを用いて各種戦術情報を共用し、進路の露払いを担当する事が多い。余談ではあるが、この機能を応用し、ＮＴパイロットが『感じ取った』敵の位置情報を元に照準補正・狙撃を行う事で、自機の索敵限界を超える距離にある敵に対しての攻撃も理論上は可能である。
こちらもＣＲ型同様、今はアナハイム・エレクトロニクス社によって生産・販売される機種となっている。

ＧＮＸ－７０７Ｔ／ＧＮＡ－０１Ｇ

ＧＮＸ－７０７Ｔ　スピアヘッド（ＳｐｅａｒＨｅａｄ／ＳＰ－Ａｈｅａｄ）
（ＧＮＡ－０１Ｇ　キリエルガンダム（Ｋｙｒｉｅｌ　Ｇｕｎｄａｍ））

【全高】
２３．２ｍ（ＧＮＸ－７０７Ｔ時）
【頭頂高】
２０．８ｍ（ＧＮＸ－７０７Ｔ時）
【本体重量】
５３．４ｔ（ＧＮＡ－０１Ｇ時）
【全備重量】
８２．９ｔ（ＧＮＸ－７０７Ｔ時）
【装甲材質】
Ｅカーボン
【動力源】
改良型擬似太陽炉（ＧＮドライヴ［Ｔ］）
【特殊機能】
・色調変調迷彩塗装
ユニオン系ＭＳ、特にＳＶＭＳ－０１ＳＧに採用された迷彩システム。光学機能を有したナノマシンを表面に塗布してあり、プログラムを上書きする事で塗装パターンや色を任意に変更出来る。
・フレーム内部水素燃料浸透構造
ＳＶＭＳ－０１系列のＭＳに採用された燃料貯蔵構造であり、機能としてはその名の通りに機体フレームに燃料である水素を浸透させ、プロペラントタンクの代わりとする物である。機体重量の軽減化に

貢献する他、余計な外部パーツを接続せずとも大容量の燃料を確保出来るという利点がある。

・水素プラズマジェット／ロケットエンジン
GN粒子の放出を制限しなければならないような状況（隠密行動時や太陽炉の故障時等）に直面した際に用いられる補助推進機関。ジェットエンジンとロケットエンジンは任意で切り替え可能であり、全領域でのシームレスな行動を可能としている。

・生体認証システム
人革連によって鹵獲されたGN－003のデータを元に搭載されたセキュリティ機能。掌部静脈・指紋・声紋・網膜の合計4パターンでパイロットを照合し、事前に登録された者が搭乗した場合にのみ太陽炉のセーフティが解除されて起動可能となる。コクピットハッチが展開され、パイロットが一定時間以上シートから離れた時に起動はリセットされ、認証を再度行う事になる。

・GNA－01G『キリエルガンダム』
GNX－707T『スピアヘッド』機体内部に隠された白兵戦闘用MS。曲線主体で構成されたGNX－707Tとは対照的に、フレームとしても機能する都合上直線的な機体外観となっている。MS内に隠されたMSであるという共通点を持つGN－004とは異なり、GN－004が換装システムの素体及び脱出用MSとしての役割を期待されているのに対して、本機は純粋に戦闘用MSとして開発され、状況に応じて戦闘スタイルを切り替えたり、GNX－707となる為の外部装甲の損傷が著しい時に強制排除して戦闘を再開する事を目的としている。

・コア・ファイター
緊急脱出用の航空戦闘ポッド。タイトなMS本体に無理矢理押し込

める為に機体構成要素は極限まで削り込まれ、ほぼコクピットと擬似太陽炉のみとなっており、一応申し訳程度にGNバルカンとスタビライザーが付属している。

・大型GNコンデンサ
背部にプロペラントタンク宜しく設置される粒子貯蔵システム。擬似太陽炉のコーン型スラスターの下部両脇に、水平から30度程下向きに末広がりになるように接続されている。GN粒子の持つ慣性制御能力とジョイント基部の稼動を利用し、AMBAC肢としても使用可能。

【武装/GNX−707T】
・GNビームマシンガン
本機の主兵装。内蔵されたGNコンデンサと機体本体からのエネルギー供給によって稼働し、GNX−704TのGNサブマシンガンでは成し得なかった、速射性と威力・射程の両立を実現している。
銃身下部には近接戦闘時の緊急防御用にGNビーム刃発振器が固定装備となっており、バヨネットとして機能する。

・GNビームサーベル＊2
左右大腿部に収納されている格闘兵装。使用時には装甲が展開し、グリップがポップアップしてマニピュレータで保持する。出力を調整する事でビーム刃の長さをある程度変更する事が出来るが、GN粒子残量に気を配りながら行う必要がある為にあまり効率的な機能であるとは言い難い。

・GNバルカン＊2
胸部上面に設置された近接防御火器。速射性を高める為に射出されるビームは小さい円錐形に成形されているが、実体弾における曳光弾のように火線を確認する為に、ある程度の長さを持つビームを射

出する事も可能。

・GNマイクロミサイルポッド＊2
両下腿部に外付けされている小型実弾兵器。通常のミサイルと異なり、着弾後に目標に対して圧縮されたGN粒子を注入し、内側から破壊する仕組みとなっている。また、ポッド1基につき6発のミサイルを搭載している為、継戦能力は高い。

・GNシールド
ディフェンスロッドとGNビームマシンガン用予備GNコンデンサを装備した防御装備。GN粒子によるコーティングが施されており、ビーム・実体弾の両方を防御可能である。ディフェンスロッドはGN粒子を放出しながら回転させる事で小型GNフィールドを発生させる事が出来る等、GNX－603Tの技術もフィードバックされている。

・NGNバズーカ
GNビーム兵装を使用不能な状況（粒子撹乱時等）や、実体弾頭の持つ様々な効果を必要とする際に用いられる射撃兵装。旧三大国家群の使用したロケット擲弾及びミサイルは口径が合えば全て使用可能であり、状況に応じてカートリッジ給弾か先込かすらも選択可能。挙げ句の果てには砲身内にGNフィールドを展開し、GNビームマシンガンのカートリッジを装着する事で、通常のGNバズーカとしても使用出来る。

・GNブレードラム
本機の外観を強く印象付ける格闘兵装であり、また、本機が持つ『最後の武器』。額部から頭頂部にかけての幅広な刀身となっており、機体前方斜め上に突き出している。A．D．2308時に発生したソレスタルビーイングとの大規模戦闘後に回収されたGNブレイド

の破片等からデータを採取して作られており、表面にＧＮ粒子をコーティングして威力を向上させたり、刀身からＧＮフィールドを展開させる等の芸当も可能。機体名称を『ＳｐｅａｒＨｅａｄ（＝槍の頭）』と綴る際の名称の由来でもある。

【武装／ＧＮＡ－０１Ｇ】

・ＧＮサブマシンガン
ＧＮビームマシンガンからバレルを取り払い、近距離での使用と取り回しの良さに重きを置いた射撃兵装。銃身長の減少により集弾率や初速が落ちているが、バレルを再接続してＧＮビームマシンガンに戻す事も可能であり、状況によって使い分ける事が出来る。

・ＧＮビームサーベル＊２
ＧＮＸ－７０７Ｔ時に使用する物と同じ物。大腿部マウントラッチに設置されたシースに収納してあり、シースの角度を変更すれば『居合い切り』も可能となっている。

・ＧＮガントレッド＊２
ＧＮＸ－Ｙ９０１ＴＷに装備されたモデルの発展型であり、攻防一体の小型装備。ＧＮビーム兵装使用時のエネルギー整流効果を付与されており、それを応用してＧＮ粒子を定着、簡易的かつ即席のＧＮビームシールドやナックルとして使用可能となっている。

・ＧＮクロー＊２
ＧＮＸ－６０３Ｔの装備の発展型。液体炸薬カートリッジの爆発力によってマニピュレータ前腕部をスライドさせ、鋭利なマニピュレータで相手に刺突攻撃を加える兵装。攻撃時にはマニピュレータの各関節はロックされ、構造自体も既存のＭＳと比して大幅に強化されている為に、ＭＳの胸部装甲をも貫通しうる強大な攻撃力を得る

事が出来た。カートリッジ装弾数は片側4発。

・GNブーメラン

GNシールドに装備されたディフェンスロッドを変形して得られる装備。GN粒子を放出しながら飛翔する事によりある程度軌道をコントロール出来る他、GN粒子を利用した脳量子波通信により自在に軌道をねじ曲げ、通常の投擲では不可能な変則的な機動を繰り返す事も可能。

【武装／コア・ファイター】

・GNバルカン＊2

唯一備えられた防御用火器であり、生存性を少しでも向上させる為に装備された。機体自体が小型な為に砲システムその物もかなり小さくなっており、威力はMSの装備するそれに比して心許ない物である。また、擬似太陽炉と直結してしまっている為に、発砲すれば推力の低下に直結するという致命的な欠陥も抱えている。

【備考】

元人革連、現地球連邦軍の青年技師見習い、リン・カォルゥ曹長が、業務の合間を縫って設計したMS。人革連での勤務経験が長い為に、同軍が採取したガンダムタイプMSのデータを多く盛り込んであり、イノベイド製の機体群とも互角に渡り合える程度のものとなっている。

政治的理由から外装がガンダムとはかけ離れる物となったGNX－704Tの余裕のある設計を逆手に取り、内部フレームをそのままMSに置き換えて外装をMSの増加装甲にしてしまうといった思い切った設計になっている。また、コア・ファイターの内蔵により、パイロットの生存性向上と擬似太陽炉の回収を効率的に行う事にも成功している。

多彩な武装や機能は本機がどの様な状況下に置かれても高い性能を発揮し、戦況を掌握する事を可能としているが、それ等全てを満足に使いこなす事は難しく、結果的に乗り手を選ぶ機体となってしまっている。

本機の最大の不幸と言えるのは、その設計された時期と状況にあると言える。実を言ってしまえば本機は実機が建造された事実は無く、設計段階で開発は止まったまま廃案となっている。

理由としてはまず、カォルゥ曹長の手による本機の設計は極めて大胆な方法で行われた事にある。カォルゥ曹長は設計開発部に勤務していたが、その勤務時間中に無断で電算機を借用し、本機の設計データを構築していたのだ。当然、軍規に抵触する行為であり、軍人として許される事ではない。

また、本機の設計された時期はちょうどアロウズ解体の直後であり、性能に陰りの見えて来たGNX－609Tを更新する次期主力MSの開発やアロウズの主力MSであったGNX－704Tの接収解体が始められた時期と合致する。勿論、この様な作業には多くの人手を必要としており、私事を優先させる事は全くのナンセンスである。因みにカォルゥ曹長は次期主力MSのコクピット・ブロックの設計担当であったとも言われ、MSの根幹とも言えるパーツの開発が遅延すれば全体に影響を及ぼす事は想像に難くない。

兎に角、その様な事情から、事実が発覚した際にカォルゥ曹長は上司であるケンズィー・テラオカノフ開発部長から鉄拳制裁を頂戴しており、更には2週間の謹慎の後に降格・左遷という厳しい処分を受けている。当然ながら設計データは破棄され、実機の開発は不可能となっている。

しかし、アロウズ解体後に接収されたGNX－704Tの機体総数が撃墜や鹵獲等を考慮したとしても2機程原因不明の喪失となっており、また、旧ユニオンや旧人革連の兵器保管庫でも幾らかのパーツが紛失する事件が発生しており、それ等全てを組み合わせた場合

には本機が１機分必要とするパーツが全て揃う計算になる。地球連邦軍は本機の存在について公式には否定しているが、各地で未確認のガンダムタイプＭＳの目撃情報が発生している事から、何者かが本機の設計データを修復・入手し、実機開発を目論んだ物と思われるが、如何せん関係者の多くは口を閉ざし、カォルゥ曹長もＡ．Ｄ．２３１３の３月に木星へ旅立って以来消息を絶っている為に、詳細は不明のままである。

RX－75－6H

RX－75－6H
対空高機動型ガンタンク

【生産形態】
少数生産機
【全高】
15．6m
【頭頂高】
15．0m
【本体重量】
87．2t
【全備重量】
114．6t
【ジェネレータ出力】
1，240kw
【スラスター総推力】
96，000kg
【速度】
94km／h（地上最大走行速度）
【センサー有効半径】
25，000m
【有効射程】
15km（有視界、ミノフスキー粒子散布下）
22km（ミノフスキー粒子不在環境下）
38km（電子偵察支援機データリンク下）
【装甲材質】
チタン系合金

【動力源】
ミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉
【主砲】
・高収束対空ビーム砲
ＲＸ－７７系の装備するビーム・ライフルの技術を転用した装備。長い砲身の内側にはメガ粒子加速帯と収束リングが多数設置され、サーマルジャケットで包む事により、高初速・長射程・高連射性の並立を実現した。エネルギー消費が激しい為、連射する場合には動きを完全に止める必要がある。右肩部に備えられ、エネルギーＣＡＰは速射砲の弾倉と併せて背部に装着される。

【副武装】
・７６ｍｍ主砲同軸速射砲
ビーム砲が使えない場合やエネルギー消費を抑えたい場合に用いられる大型対空火器。ビーム砲の真下に沿う様に配置されている為、ビーム砲のリチャージが完了次第、照準調整をする事無く射撃の再開が可能である。胸部上面の形状が砲に合わせて変更されている為、幅広い俯仰角範囲を持ち、地対地攻撃にも使用可能である。

・４０ｍｍ４連装機関砲＊２
既存のＲＸ－７５系ではボップミサイルとなっていたが、装弾数の低さや関節可動域の狭さと言う欠点を抱えていた為、本機は腕部の構造その物から変更されている。後部末端から大型弾倉を交換する機関砲ユニットを上腕部で吊り下げ、肩部から伸びるシリンダーと上腕接続部の超電導モーターで関節を稼動させる仕組みとなっている。

・８連装小型垂直ミサイルランチャー
車体後部に位置し、砲の旋回やリチャージが間に合わない場合に用いられる対空兵装。基本的には斉射で使用し、不活性高圧ガスであ

る程度の高さまで射出された後にミサイル本体のロケットモーターに点火し、目標へと飛翔する。予備弾は存在しない為、使い切った後は基地拠点等で射出ガスとミサイルの再装填を受ける必要がある。

・13．2mm重機銃
車体前面の旋回式無人機銃座に内蔵される防御火器。大型ドラムマガジンと給弾ベルトで接続され、豊富な弾数を備えている。必要とあらば機銃座のハッチを開放し、取り出して銃把を展開する事で、歩兵にも使用可能となっている。

・スモーク・ディスチャージャー＊4
60mm口径の発煙弾発射機を3つ束ねた装備で、胸部上面や車体等、機体各部に設置してある。機体センサーと連動し、時限信管を調整して発射される為、適切なタイミングでの展開が可能。チャフやフレアも混合封入しており、ミサイルに対する防御力も高い。

【備考】
U．C．0079に開発された装甲機動戦闘車輌の1機であり、RX－75より発展・一点特化したモデルである。最大の特徴はその熱核ホバーシステムと単座式操縦装置であり、今までに無い軽快な機動力と強力な武装を両立している。
大戦中に接収されたMS－07H系やMS－09系のMSに搭載されたホバー機動システムの完成度は高く、また、開発が既に始まっている中での出来事ではあったが、U．C．0079．11．30に発生したジャブロー攻略作戦に於いて、要撃機部隊や対空火器群の執拗な攻撃にも関わらずガウ攻撃空母の撃墜数は18機中8機であり、MSは28機の降下を許し、対空火器やトーチカ等の破壊を許してしまっている。それ以前からもガウやドップ等の航空機とMSの混合投入に対応する為、対地・対空両用かつ機動性の高い火器運用システムの開発は必須であり、コアブロックシステムを搭載し

パーツの換装が容易であるＲＸ－７５系ＭＳが母体として選出され、Ｕ．Ｃ．００７９の１０月初頭には既に開発が始められていた。

主要対空火器の多くは右肩部に集約されており、頭部と左肩部に搭載された偵察機用のそれと同等の能力をセンサー群から転送されたデータを元に精密かつ高密度な射撃を行う事が出来る。また、対地攻撃も４連装機関砲や重機銃をメインに、ビーム砲の水平射撃を併用して対応する。

１号機から３号機までの先行量産型の完成は１２月半ばと既に戦局は宇宙へと移行していた為、未だに根強い抵抗を続けるアフリカ戦線や北米戦線へと投入され、戦後は約３０機が生産されてジャブローやキリマンジャロに配備されていた。しかしＵ．Ｃ．００８７に発生したグリプス戦役中、その全機が失われ、追加生産も行われていない為、現存する機体は存在しない。

ちなみに先行量産型の内の２号機は、大戦中のアフリカ戦線にてＭＳ－０８タイプとの戦闘を経験、大破すると言うある意味貴重な事態に遭遇している。

ＪＭＦ－１３３８Ｋ

ＪＭＦ－１３３８Ｋ
クノイチガンダム

【生産形態】
軍事用特殊隠密戦闘機
【全高】
１６．４ｍ
【重量】
７．１ｔ
【装甲材質】
ガンダリウム合金スーパーセラミック複合材
レアメタル・ハイブリッド多層材
【特殊機能】
光学迷彩
ネオドイツ開発部との技術交流によって齎された、ＧＦ１３－０２１ＮＧ由来の所謂『隠身の術』。ただし、技術自体は１５年以上昔の物をネオジャパンが独自に発展させて用いているので、精度こそ高いもののエネルギー消費等の面では本家に今一歩及ばない。これと立体映像投射器、スモークを応用し、分身も可能となっている。

低温域機動システム
ステルス性が重視される為、ジェネレータやスラスター等の排熱管理には専用の冷却デバイスが装備されており、それの管理システムを総括してこう呼称する。排熱を極端に抑えるのでは無いので機体への負荷も小さく、長時間の使用が可能となっている。

ダイレクトセンサーリンクシステム
通称『心眼』。ガンダムファイターの感覚神経と機体のセンサーとを同調させて外部の情報を伝達する事で、極めて正確かつスピーディに周囲のデータを得られる。搭乗者の感覚がダイレクトに機体と繋がる為に、ダメージのフィードバックも大きいという欠点はあるが、通常では感知不能な事象に対しても第六感での感知が可能となる（当然、搭乗者の技量に大きく依存する機能ではあるが）。

【武装】
ニードルガン＊2
前腕部内側に搭載された近接防御火器。その名の通り、針の様に細い弾丸を発射する。不活性の高圧ガスを用いて発射する為にいつ使用されたかを視認するのは難しく、関節部への攻撃・破壊に用いられる事の多い『繋ぎ』の為の武装でもある。

メタルクナイ＊2
短めの刀身を持つ格闘戦用兵装。腰部左右にマウントされている。超高硬度のレアメタルを多用し、ネオジャパンの持つ高い製鉄技術を用いて作られた為、高い強度と威力を持っている。ワイヤードサイズの反対側に接続して使用したり、単体で投擲したりと使い道は幅広い。

ワイヤードサイズ＊2
前腕部外側に設置される特殊攻撃兵装。特殊高分子ワイヤーからなるモノフィラメント・デンドリマー構造を採用しており、射出後も自在に軌道を変更する事が可能。また、極細な構造から敵機からの視認性は低く、武装の隠密性を保ったまま攻撃出来る。また、前腕に接続したまま使用したりも出来る為、格闘戦での緊急防御や意表を突いた攻撃も可能となっている。

ショートビームソード

グリップに伸縮機構を備えたビーム・サーベルであり、片刃の忍者刀の様な刃を展開する。非使用時には腰部後面にある回転式のラックに接続される。斬り掛かる時にのみビーム刃を展開する構造を採用しており、エネルギー消費を抑えつつ太刀筋を読まれ難い様にしている。

スモーク・ディスチャージャー

ただの煙幕だけでなく、ランダムに成形された重金属微粒子を散布する事で、ビーム兵器やレーダー波を著しく減衰させ、より高度な撹乱を可能としている。また、燃焼抑制剤も同時に散布する事で、爆発に対する防御も可能である。

【必殺技】

真空月影落とし

敵機の真後ろに進入し、ワイヤードサイズで両腕を拘束。自機と共に空中高く舞い上がり、拘束を解いてショートビームソードで敵機の頭部を破壊し、先に地上に降りて落下してくる敵機を受け止めるという物。対MF戦を想定しており、第１５回大会より導入された『頭部を破壊されたMFはその場で自動停止する機能を搭載している事』というレギュレーションを見越しての技であり、それ以前のMFやMF以外の機動兵器に対しては、受け止めるのではなく重要部を刺し貫いたりして確実に行動不能に陥れる。

霞崩しの剣

スモーク・ディスチャージャー展開後に光学迷彩・分身を展開、敵機に対して集団で攻撃を仕掛ける様な幻覚を見せた上で、背後から頭部を刈り取るという物。これも、第１５回大会用MF以外の敵に対しては、特定部位の攻撃に変更する事で大きなダメージを与える事が出来る。

【備考】
ネオジャパン軍の開発した特殊戦術対応機であり、隠密戦を得意とする。名称からも分かる通り、女性をイメージさせる細身のシルエットが特徴的であり、ネオスウェーデンのスタッフを招致して設計された物である。第13回大会（優勝者：ドモン・カッシュ）、第14回大会（優勝者：ユウゴ・カガミ）と連覇を重ねるも、大会の度に何かしらの問題を抱えるガンダムファイトその物に対しての警備と、時に発生するであろう戦闘を見越しての機体となっており、他国のファイターが気を散らす事無く試合に集中出来る様に、また、目標を取り逃がす事無く確実に仕留められる為に、ステルス性に最大限の配慮をした設計となっている。射撃戦闘や多対多戦闘は量産型ＭＳであるニンジャーやノブッシ、ローニンに任せ、それ等の指揮統率をしつつ、特殊目標等の撃滅を担当する。その為、武装は格闘戦闘に寄った物となっており、通常のＭＦ同様の操縦システムであるが故に、搭乗者には高い技量が求められる。

ＧＦ１５－００１ＮＪ

ＧＦ１５－００１ＮＪ
ケンゴウガンダム
（ムサシガンダム／コジロウガンダム）

【生産形態】
第１５回ＧＦ専用機
【全高】
１６．９ｍ
【重量】
７．８ｔ
【装甲材質】
ガンダリウム合金スーパーセラミック複合材
レアメタル・ハイブリッド多層材
【特殊機能】
リニアシース
ビームソードのラックに設置された機構で、名前の通り『鞘』の様な外見をしている。ソード収納時にはエネルギーチャージャーとして、ソード使用時には柄を電磁加速する事で高速での抜刀が可能となっている。また、シース自体もある程度の可動域を有している為、スタビライザーとしても機能する。

換装・ムサシガンダム
『動』を体現した長短二刀流のガンダムに換装する。装甲を一部排除し、高機動戦闘に対応しており、積極的に攻め込んでの戦闘を得意としている。

換装・コジロウガンダム

『静』を司る長刀一刀流のガンダムに換装する。ムサシとは逆に装甲を増やし、敵の攻撃に対してカウンターをかける事でダメージを与えるのが主な戦法である。

【武装】

マシンキャノン＊2

胸部上面に搭載された射撃兵装。相手の懐に飛び込む際の牽制に用いる為の兵装ではあるが、踏み込みの速度が並みの機体の比では無い為、使用される機会は少ない。一応ユニット構造を採用しており、不要と判断した場合にはパージも可能であり、出撃前に補助動力ユニットや冷却材カートリッジ等に交換される事も。

ビームソード＊2

本機唯一の武装と言ってもあながち間違いでは無い格闘兵装。非使用時には腰部両側面のリニアシースに装着される。出力・刀身長をある程度変更出来、2本を接続する事で更に威力を増大させる事も可能。最大出力時にはシャイニングフィンガーソードと同等かそれ以上に巨大な刀身を形成する事も可能だが、エネルギー消費が激しいのと、長時間展開し続けるとビーム発生器が焼き切れてしまうのが難点。

【必殺技】

迅雷居合い切り

全形態で使用可能。スラスターを全開にしつつリニアシースを起動し、さながら雷光の如き居合い切りをすれ違い様に放つ。最大速度は瞬間的にではあるが音速に迫る為、視認してからの回避は極めて困難である。

二刀嵐舞の剣

ムサシガンダムで使用可能。ビームソードを長短2本起動し、回転して敵の攻撃を回避しつつ滅多切りにする。大気圏内、それも地上でのロール機動という事でかなりの制御技術を必要とするが、一対多戦闘でも有効な攻撃である。

止水突破の剣
コジロウガンダムで使用可能。敵の攻撃に対して僅かに身を逸らすだけで回避、その直後に長刀身に形成したビームソードで敵を貫く。主に一対一での戦闘に用いられるべき技であり、多数を相手取るにはやや不向きである。集中力と瞬発力が鍵とは開発者の言。

螺旋荒咆の剣
ムサシガンダムで使用可能。多数の敵を相手にする事を目的としており、敵の中心に踊り込んだ後に自機を竜巻の様に回転させ、敵を空中高く巻き上げてから連続して斬撃を加え、殲滅する。一対一での場合、回転しながら相手に突撃をかける技となる。

巨刃閃撃の剣
コジロウガンダムで使用可能。エネルギーを最大まで投入した巨大なビームソードを大上段に振りかぶり、スラスターも併用して一気に振り下ろす。シャイニングフィンガーソードや爆熱ゴッドスラッシュの発展版であり、これを使用した後にもある程度の戦闘継続が可能となっている。

【備考】
第15回ガンダムファイトの専用機体としてネオジャパン軍が開発した機体。過去2大会を優勝したGF13－017NJ?及びGF14－001NJとはほぼ同一の機体となっており、過去の優勝機体及びそのバリエーション機はその後3大会は出場不可という新規定が成立し、新たな機体が設計される運びとなった。

機体は堅実ながら高いポテンシャルを発揮したGF13－017NJを参考にされており、スーパーモードこそ実装されていないものの、機体各所にその面影が見られる。武装は極端に少ないが、火器運用システムの容量を減らす事で機動パターンの多様化や煩雑な火器管理を必要としない事を目的とされており、また、搭乗者の剣術がダイレクトに反映されるという事も、搭乗者にとっては大きなメリットであると言えよう。
ガンダムファイト開催中に何らかの理由で一対多戦闘に突入した場合も迅速に対応可能であり、有事の際にはネオジャパン軍に編入されて事態の収束を担当する事になる。
また、使用機会の少ないコアランダーは撤去されており、整備性と反応速度が向上している等、細かい所でも実際に大会を経験した歴代のMFからデータのフィードバックが行われている。

ＲＸ－０８２Ｅｘ－０２

ＲＸ－０８２Ｅｘ－０２
ＮＥＸＴ　Ｇ－ＵＮＩＴ（ｗｉｔｈ　Ｐｈａｎｔｏｍ－ｓｙｓ）

【生産形態】
新概念実証試験機（計画のみ）
【全高】
１８．４ｍ
【頭頂高】
１８．０ｍ
【本体重量】
３９．２ｔ
【全備重量】
６９．８ｔ
【ジェネレータ出力】
１，６８０ｋＷ
【スラスター総推力】
１９２，０００ｋｇ
【センサー有効半径】
６，２００ｍ
【装甲材質】
ルナ・チタニウム合金
【動力源】
ミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉
【特殊機能】
ＺＥＰＨＹＲ－ＰＨＡＮＴＯＭ　Ｖｅｒ．３．６．４
戦前から人型機器の無人制御ＯＳとして研究されてきた物の発展改良型。マンポイントを完全に無視してプログラミングされており、

有人機が本機に追随する事は至難である。また、倫理プロテクトや火器管制も全てシステムが一括して操作出来る様になっており、人の手の介入が一切無くとも完全に自律行動が可能となっている。

【武装】

複合ウェポンユニット＊2
両腕部に直接接続される複合兵装。むしろ、これが本来の腕部ユニットとして設計されたと言っても過言では無い程に機体の戦闘能力はこのユニットに依存している。やや大型かつ複雑な構造となってはいるが、腕部に密着して接続される為に取り回しはそこまで悪い物では無い。

・ビーム・ライフル
メインとなる射撃兵器。腕部コネクタを通じてジェネレータと直結したビームドライブデバイスから発射される。コンデンサ容量と排熱の管理プログラムを調整する事で、出力と連射速度を調整し、ビーム・ランチャーやビーム・バルカンとして幅広い運用が可能である。

・ビーム・サーベル
ビーム・ライフルと同じく、ビームドライブデバイスより発生する。ジェネレータから直接出力を得ている為に他機種の装備するビーム・サーベルと比して高い威力を持っている。

・ライアット・ランチャー
ビームドライブデバイスが前腕部上面に位置するのに対し、こちらは前腕部下面にレイアウトされている。通常機の装備する大型無反動砲の役割を担う兵装である。砲身長はそこまで長い訳では無いが、装薬を調整する事で高初速を得る事に成功しており、遠距離までの攻撃が可能となっている。ユニット尾部、通常機では肘部装甲である部位に弾倉があり、これを交換する事で多彩な弾種を使用出来る。

・シールド・ユニット
ユニット及び機体を防御する増加装甲ユニット。既存のMS用シールドと同等の構造を保持しており、防御力は高い。ミサイル防御用

として、表面にチャフ・フレアディスペンサーが設置されている。

【備考】

ＭＳとはまた異なる次元を目指した人型戦闘機動体であり、一年戦争中に開発され、戦後封印されていたと言われる無人制御技術を投入している。

予めプログラムされた内容に応じてミッションをこなす旧来の無人兵器とは決定的に異なり、あくまで『自己』の判断の下で行動する。高度に教育されたＡＩはＲＸシリーズよりアップグレードされた学習型コンピュータと組み合わせられる事により、確実かつ高速での戦況判断と最適な行動オプションの選択が可能となっており、有人機に劣らぬ行動力を持ち合わせている。また、パイロットと異なり感情という不確実な物が存在しない為に、ミッションの遂行と友軍及び降伏者の生命を最大限に重視し、メインコンピュータがダウンしない限りは終始一貫してミッションに忠実な行動が可能である。

外観上は有人機と誤認させる意味も込め、ガンダムタイプを参考に腹部にはコクピットハッチ状の装甲が設置されているが、ここも一応は冷却装置を搭載してある為、刺突攻撃を受ければ駆動に悪影響を与える可能性も充分にある。メインコンピュータは頸部直下に位置しており、最悪、腹部から下を切断されたとしても、ＡＭＢＡＣ性能等が大幅に低下するものの、上半身だけで行動可能である。

ＦＲＸ－７８

ＦＲＸ－７８／ＲＧＭ－７９
偽装型ガンダム（ガンジム）

【生産形態】
量産機改修型
【頭頂高】
１８．０ｍ
【全高】
１８．０ｍ
【本体重量】
４１．４ｔ
【全備重量】
５９．２ｔ
【動力源】
ミノフスキー・イヨネスコ型小型核融合炉
【ジェネレータ出力】
１，３５０ｋｗ
【スラスター総推力】
５５，５００ｋｇ
【センサー有効半径】
５，９００ｍ
【装甲材質】
チタン系合金、一部ＦＲＰ
【武装】
頭部：６０ｍｍバルカン砲＊2
連邦軍ＭＳの標準装備となる近接防御火器。頭部内装の設計変更が行われている為に、ＲＸ－７８型のモデルと比して装弾数は増加し

ている。本機の場合、偽装として額部に設置された角飾りが射線の妨げとなっている為に、発射には相応のリスクを伴う物となっている。

バックパック：ビーム・サーベル＊2
ＲＸ－７８型から引き継がれたビーム兵器の1種。威力の低下は量産モデルでも発生しておらず、直撃さえすれば重ＭＳはおろかＭＡや艦艇にすら有効打を与えうる兵装である。左背部の接続ユニットに1基がマウントされており、反対側には強引に溶接された簡易なラッチに突っ込んで固定してあるだけとなっている。その為、右のサーベルを使用する際には固定用のワイヤーを引きちぎる必要があり、再度のマウントは基本的に不可能である。

右手：ビーム・スプレーガン後期型
ボックスタイプの照準補助センサーが付属した、ビーム・スプレーガンの後期モデル。大気によるビームの拡散や地磁気による微細な偏向（メガ粒子自体は電気的に中性ではあるが、粒子加速の際に影響を受ける）等には対応していない為、相変わらず長距離での使用には向かない。また、エネルギーＣＡＰ等消耗品のラインもまだ１００％確立しているとは言い難い為、整備性も悪い。

左手：標準シールド
通常のＲＧＭ－７９が装備するタイプと同等の物。何ら改修等も施されてはいないが、ＲＸ－７８型の持つそれと基本設計は共通であるので、防御力の高さは折り紙付きである。裏面に予備のビーム・サーベルをマウントしたり、前腕部のマウントラッチに接続してマニピュレータを塞がず運用する事も可能となっている。

【解説】

オデッサ攻略作戦後に捕虜等から得た情報として、ジオン公国軍にＲＸ－７８－２が『連邦の白い悪魔』として恐れられている事が判明し、急遽前線で設立された『フェイク・ＲＸ計画』（計画と呼べる程格好の良い物では無いが）に則って改修されたＭＳである。基本的には全身のカラーリング変更と一部にパーツの追加を行っているのみであり、内装のチューニングもバランス調整程度に止まっている為に、原形機であるノーマルのＲＧＭ－７９からの性能向上は無い。逆に、額部に設置されたＶ字アンテナを模した角飾りがメインカメラに若干干渉して索敵範囲を低下させていたり、僅かとは言え追加されたパーツが機体バランスを崩した上に重量を増加させている辺り、規格外の急造品である事が伺える。
計画ではＲＧＣ－８０に更なる装甲化とダミーの砲身を追加した【ＦＲＸ－７７】及び、下半身を喪失したＲＧＭ－７９と砲塔が撤去された６１式戦車を無理矢理合体させた【ＦＲＸ－７５】も検討されていたが、本機１機が完成した時点で資材の使い込みが発覚。関係する部隊は最前線に叩き込まれ、否が応でも敵の目を引き付ける本機は陽動撹乱を主任務として酷使されている。
因みに、本機の【ガンジム】と言う愛称は、計画発案者の１人である東洋系の整備士の『ガンダムっぽいジムだから、略して【ガンジム】で良いじゃないか』と言う、非常に大雑把かつ安直な発言に由来している。

HMS雑談　From U.C.（前書き）

皆様、こんにちは。初めまして。駆け出しの軍事系ライター、ユウナ・オーエンです。とは言ってもこの名前、偽名なんですけどね。あちこちの機密に潜る以上、致し方無い事なのです。

さて、本日はMS開発企業が興味深いファイルを入手したという事で、そのインタビューを行いたいと思います。

担当者と直接会う事は叶いませんでしたが、レーザー通信でのインタビューには応じて下さいました。では、行ってみましょう。

HMS雑談　From U.C.

――どうも、こんにちは。

ミューラー氏（以下敬称略）：「よっ、久し振りだなぁ。前に来たのは、動態保存してあった79Bの試乗会だったか？　AMBACで振り回されて人一倍デカい悲鳴を上げてたから、良く覚えてる」

――かっ、からかわないで下さい！　……取り敢えず、自己紹介をお願いします。

ミューラー：「ムキになるなって。あー、アルブレヒド・ミューラー。アナハイム・エレクトロニクス社フォンブラウン支社第11開発局既存機動兵器研究部門制御システム研究開発課地球連邦系担当係長……。要は、連邦のMSをバラしてコンピュータの中身を覗く係だな。一応RMS－106やMS－11とかも流れてくるから、結果的にはジオン系の機体にも強い」

――なるほど。

ミューラー：「結構オモシロイ仕事だから、君もペンで食ってけなくなったらウチに来ると良い。ちょうど人手が足りなくてね、いつでも大歓迎さ」

――検討しておきます。さて、今回聞かせて頂きたいのは、先日新しく入手された新型MSについてなのですが……。

ミューラー：「新型とは言っても、一年戦争が終わってから少し後の機体だ。大体……10年前の機体になるのか、早いもんだな」

――そうなりますね。

ミューラー：「入手した資料は、ＲＧＭ－７９の特化仕様機についてだ。地上での運用を想定した、スナイパー系の機体になる」

――資料……ですか？　実機では無く？

ミューラー：「あぁ。一応目は通してみたが、少し傷みがあって本物の仕様書かどうかまでは分からんが。ただ、ちょっと内容は気違いじみていたな」

――気違い、と言いますと？

ミューラー：「ＲＧＭ－７９Ｓ……。俺達みたいな専門屋の間でもその存在について意見が分かれてる機体があるってのは知ってるよな？　今回流れて来たのは、そのカスタムタイプだ」

――ジム・スパルタンの改修機ですか。あれですら過剰装備の感が否めず、どうも存在に疑問符を打たざるを得ないのですが……。

ミューラー：「だろう？　だが、Ｓ型が他に存在せず、Ｓ型が投入されたと言われる戦線では実際にＳ型による被撃墜としか考えられん様な被害も出ていたワケだ。Ｓ型実在派の論拠はここにある。まぁ、火葬戦記では『Ｓ型＝スナイパー』と勘違いされているがね。……っと、話が逸れたか。取り敢えず、この機体、ＳＧ型に関してはＲＸ－７８型と同様の思想が見受けられるのは確かだな」

――ガンダムタイプとですか。すると、実戦配備機としては過剰な性能と言う事になるのですか？

ミューラー：「そうなるな。Ｓ型のベースとなったＳＰ型を上回り、後年に開発されたＲＸ－１７８にすら匹敵する。８０年代初期の兵器としてはオーバースペックと見て良いな、００８３期のＧ――」

――すみません、回線の調子がよろしく無い様なのですが……。

ミューラー：「済まない、ちょっと同僚が有線を間違って弄ったみたいだ。もう大丈夫、続けよう」

――分かりました。

ミューラー：「とにかく、この機体は異端児でしか無い。ＲＸ－７８ＮＴ－１から発展した球殻コクピットや一部の内骨格もそうなんだが、フルアーマー化も可能。ビームライフルを難無くドライブするかと思ったら、そのライフルも初期的なＥパック構造を採用と来ていやがった」

――００８０年にＥパック技術ですか!?　それは厳しいですね……。連邦系では００８５年付近での７９ＣＲの装備していた物が初出だと思いますが。

ミューラー：「あー……そうなるな。ぶっちゃけウチもこっそり関わってたが、γ計画のも大体同じ時期になる。ＮＴ－１のライフルにも見た目は弾倉っぽい何かが付いてはいるが、ただの冷却剤カートリッジって見方が有力だろう。このＳＧ型は、どう考えても使われている技術が『早過ぎる』機体だ。かと思えばＦＡ時の格闘兵装に純粋質量兵器であるパイルバンカーが付いていて、時代錯誤も甚だしい面もある。ＭＡ殺し（ジャイアントキリング）を狙いたいなら高出力型ビームサーベルとか、別の手段だってあるワケだからな」

――端的に纏めるならば、『趣味的な機体』と言う事ですね。

ミューラー：「そう言う事。戦後に敢えてこういう機体を作る必要も無いしな。ＲＸ－８１が出来るまでの繋ぎが欲しいなら、７９Ｃや７９Ｇを増産すれば良いだけだ」

――その方がラインも安定しますしね。では、この機体に関しての纏めと所感をお願いします。

ミューラー：「００８０期に存在するとは考え難い異端者、だが８５年なら或いはと考えんでも無い。趣味的でありながら、ある種の信念と言うか、筋道通った物が感じられる機体だ。ウチで出た廃材からでもきちんと組み上げられるだろうし、一度真剣に弄ってみたい機体ではある。……こんなところか」

――本日は忙しい中、ありがとうございました。

ミューラー：「いやいや、君のインタビューならいつでも歓迎さ。あまりレベルの高い機密に関わる様な奴は勘弁だけどな」

――分かりました。ではまた、機会があれば。

HMS雑談　From U.C.（後書き）

ミューラーさんのオフィスも少しだけ映像に映っていたのですが、やはりアナハイム社と言うべきか、綺麗な作りでした。
　格納庫と直結しているらしく、大きな窓からはハンガーに並べられた機体群を見る事が出来ました。大型のブレード・アンテナと広角型のモノアイからはバーザムの系列である事が伺えます。また、新しく搬入された機体なのでしょうか、大型のコンテナが運び込まれるのも見えましたが、中身が何であるかまでは判別不能でした。
　また機会があれば、この様な形で皆様に古くも新しい機体を紹介して行ければと思っております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0751t/

暇零's MS Station

2011年11月15日16時10分発行